

院長のひとりごと2

テーマ「試金石」しきんせき

平成二十九年あけましておめでとうございます。先月はひと月の救急搬入患者数が初めて六百人を超えました。昨年一年間では、約六三〇〇人の患者さんが救急車で受診されました。この数字は、北九州圏内で、一番多い数字です。ちなみに、肺炎、骨折、脳卒中の患者数も北九州で一番になりました。名だたる大病院も北九州には多い中で、ベッド数も二二七床と多くない当院が、このような結果になったことは、喜ばしいことと思います。

しかし、赤字経営の病院も増える中、病院運営が困難になっていることが伺えます。救急を見るには気力、体力、技術のみならず、最後の砦になろうとも、守り抜くという職員の気構えが必要です。職員にこうするんだ、と鼓舞してもなかなかうまくいかない現実があるのだと思います。当院がうまくいっているのは、こういう気概のある職員が多いということです。皆さん本当に感謝しております。

今日の話題の「試金石」しきんせきは、金などを擦りつけ、その跡で金の純度を調べる石の事を指します。その意味から、「価値を確かめる・試すもの」という意味でも使われるようになりました。私自身も、当院理事長から、多くの高いハードルの目標を仰せつかり、一見、無理難題を押し付けられたように感じたことも度々あります。院長になって、安楽な日々はないものと考えてはおりましたが、これだけたくさん宿題をいただくやはり大変ですよ。(頭にきたときは誰に相談する事もできず、庭に穴を掘っておらびます。)しかし、人間というものは大したもので、ハードルをクリアするだけ強くなるし、要領もよくなり、高いハードルも低く感じるようになります。いわゆる問題解決能力の向上ですね。でも人は誰でも、若いころから宿題を出され、それを解くことで成長するわけで、大きな試金石を貰う人はそれだけ伸びるチャンスが広がるわけですから、ある意味期待されているからかもしれないですね。

インフルエンザ感染防止、蔓延防止。

平成二十九年一月十日 藤井 茂

第十五章

